

1975

出会いの序章

手前、生まれも育ちも品川、旗の台です

教育

新宝島

4月特典

向山洋一教育資料

No 17

2025
APR.



(調布大塚小学校 5年2組 1975)

本資料について

今号のテーマは「出会いの序章」である。

1975 年。向山洋一氏は 31 歳。

3 月、大森第四小学校にて全身全霊を込めて二代目の卒業生を送り出す。

そして 4 月、調布大塚小学校に転勤。三代目となる 5 年生の担任となる。

学級通信集『エトセトラ』第一巻の序文に、向山氏は次のように記した。

「まったく偶然に調布大塚小に赴任し、まったく偶然に 5 年 2 組の子どもたちと出会ったのである」

「この間、幾度となく心は前任校の大四小に回帰した。そこで過ごした 7 年間への回帰ではない。俺がそこで生きてきた、7 年間の“人生”への回帰であった」

「不器用な俺は、新しい出立を白紙で始めることはできない。これまでの生への執着の上にしか、現在の生を考えることができない」

「しかし俺は、『大四小の方がよかった』とか『大四小に帰りたい』などと口にしたことも、考えたこともなかった。俺の“現在”は、大四小の延長上にあるのだと言ってきたのである」

「子どもたちもまた、それまでの生の延長に“現在”を生きているのである」

「生に執着しつづける人間が、偶然出会った新しい環境の中で、おずおずと新しい生を築こうとした努力の記録が、この『エトセトラ』第一巻である」

青年教師・向山氏が、

新たな赴任校で子どもたちと出会い、歩み始めたその「序章」。

そこに込められた覚悟と子どもたちへのまなざしを、お届けしたい。

この新たな赴任先である調布大塚小学校で、向山氏は「分析批評」をはじめ、後に「向山型」と呼ばれる数多くの実践を創出していくことになる。

この「出会いの序章」は、新しい教育文化誕生の「序章」でもあった。

本冊子には、

- (1) 向山洋一『学級通信エトセトラ（第一巻への序）』調布大塚小 5 年 1975 向山実物資料 A111-05-01-00
- (2) 向山洋一『学級通信エトセトラ No.1 ～ 12』調布大塚小 5 年 1975 向山実物資料 A111-05-01-01 ～ 12
- (3) 向山洋一『学年だより（4 月号）』調布大塚小 5 年 1975 向山実物資料 A111-15-01
- (4) 向山洋一『学級通信スナイパー No.1 ～ 2』調布大塚小 5 年 1977 向山実物資料 A113 ①-05-01-01 ～ 2

他が掲載されている。

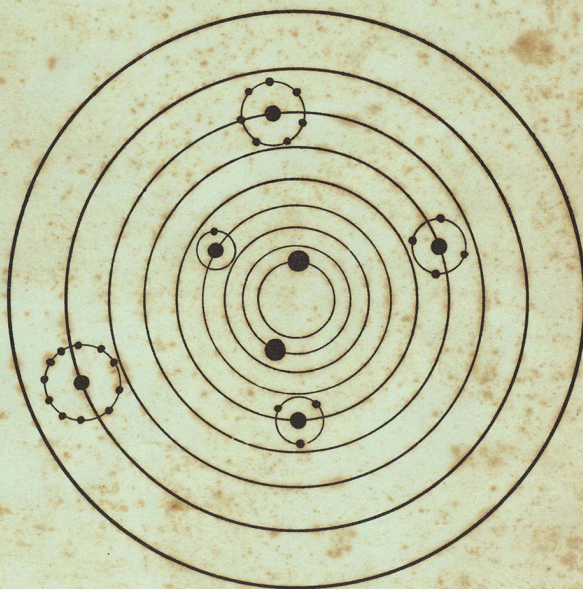
解説は、手塚美和氏である。

学級通信

えとせとら

第一巻 (No. 1 ~ No. 50)

1975. 4. 7 ~ 6. 13



東京都大田区立調布大塚小学校五年二組

「えとせとら」第一巻への序

◇ おそろおそろ調布大塚川の枝門をくぐってから、ほぼ三ヶ月の月日が流れた。

流氷者渡世のこの寂業では、転任しなければいけないという宿命はいつとつきまとう。全く偶然に調布大塚川に赴任し、全く偶然に五の二の子ども達と出会ったのである。

◇ この間幾度となく、心は前任校の大皿小に回帰した。単に、そこで過した七年年の歲月への回帰ではない。俺がそこで生きてきた、七年年の人生に対する回帰であった。

◇ 俺は、子ども達のためにほどと思って教師になったのでもない、
「良い先生」になれるほどと思って教師になったのでもない。更に、給料が良くて、住みごちが良いほどと思ってなったのでもない。教師に甘い夢を見たわけでもなく、「教師に^ぶる」や「教師に^{しか}」を選んだのでもない。

◇ 自分の人生がそこにあるように思ったからであり、自分が生きていけるように思ったからである。他人にとってどうかは問題ではなく、自分にとってどうかは問題であったのだ。

◇ だから俺は、自分の生に執着をしつづける。それは、大皿小への里心とか、乳離れとかいうお手軽なものではないのだ。現在の大皿小への回帰ではないのだ。俺が生きてきた過去七年年の大皿小への回帰なのである。そこには、俺以上に生に執着する魂があった。

◇ 不器用な俺は、新しい出立を、白紙ですることはできない。今までの生への執着の上にしか、現在の生を考えることはできない。まる

で、エ女チックな、青くさい生き方しかできないのだ。

◇ しかし俺は、「大皿川の方が良かった」とか「大皿川に帰りたい」とか言った事はなかったし、考えた事もなかった。俺の現在は、大皿川の延長上にあるとってきたのである。

◇ 宮城が「大阪のクラスは、男の子と女の子が仲のいいクラスだった」といった。大河原が「オーストラリアは素晴らしい国だった」と言った。俺はうれしかった。一人の人間をして仲のいいクラスだったと言わしめ、一人の日本人をして素晴らしい国だったといわせる人間の存在がうれしかった。「その心を大切にしなさい。いつか日本も素晴らしいと心から思えるようになる事を願っています」と返事に書いた。子ども達だって、現在までの生の延長に現在を生きているのである。

◇ 教師は、他の職業にくらべて少しは、生き方にかかわれるのである。自分の生きている事の証しが、子どもにとってのあこがれ、反感、無視の対象になるのである。子どもにとっての生きるとは何かを、見てやれるのである。

◇ 子どもにとって価値ある人間に、そして子どもにとってのりこえられ価値のある人間になる努力、営みが、俺にとっては生きていることの証しであり、俺の教室を支える教育の思想の表現である。

◇ 生に執着しつづける人間が、偶然出会った新らしい環境の中で、おずおずと新らしい生を築こうとした努力の記録がこのエトセトラオー巻である。ためらいがちな“ぼく”が三ヶ月の営みを通して“俺”に脱皮するまでの記録である。俺は今後とこの“えとせとら”を、何よりも自分自身に向けて発行していきたい。

1975. 6. 27.

向山 洋一

えとせとら

1975.4.7
No. 1
調布大塚小
5年2学級通信

向山洋一の口上

手前、生れも育ちも品川、旗台です。縁ありまして、スマトラ一家にゆらじをぬぐことになりました。(注: 今度の校長さん 須磨鹿雄さんというのです) どうゆんどうって21文です。(注: 念のためにつけ加えると、引当なわけです。) 176cm 75kg です。(注: だから、やや太めなのです。) 囲碁が好きで(自称3段) 将棋が好きで(自称初段)、麻雀が好きで(自称ハシゴ段)、その上お酒も好きなのです。(注: 「あらいやねえ、今度ははすれお」などと、まだいぢめ下さい。) なにぶん若年なれば(注: 調布大塚小に来て、自分の若さを発見しました。前任校では年寄りに分類されていたのです。)懸命に努力したいと思いますので、スミからスミまで、ズ・ズ・ズーと御願ひ上げ奉ります。

<この字の顔なのです。>



出合いの序章 その1 出合い前夜

◇ 5年2組の子供達の名簿をながめながら、席をすごした。隅かときめくのである。いまだ名しか分らぬ数えるの一人一人に、想いをよせる。桜 千枝、しゃれた名だ。春四月、出合いの相手としては、うってつけた、向井正三、どこかで聞いた名だぞ。そうぞう、お銭の名が向山まさるというのだ。一宮ちがいではいいか。五十嵐、栗山、今年卒業させたクラスにいた。陶山、須山ほら前のクラスにいたけどなあ。平 和民、これはすごい名だ。平和を求める市民となるじゃねえか。駒形、箕屋にあったなあ。などと、想いをめぐらすのである。

◇ 出会いとは、人生を意味あらしめている最高のものだと思う。今までの規範性を打ち壊されるような、非連続的（非日常性の）緊張ある出会い。今までの何かが否定され、新しい何かが生まれるような出会い。ただ単に知りあうのではなく、自分の何かとかかわっていくような出会い。そうしたことを具現させていきたいものだ。だから、ぼくと、子供達が、真の意味で出会うには、しばらくの期間がかかるにちがいない。

◇ 五日の日、教室の準備をした。六年生の子供達に手伝ってもらった。といって、新任のぼくは、何も荷物が無いから、学校中を案内してもらった。体育館の裏まで行ってみた。「あい、みんなは仕事してんだから、ああいそがしいとか、つかれるなあぐらいいのかっこうはつけるよ」といった祈、時々オーバー気味にやっていた。かわいらしい子供達だった。屋上に出て、説明してもらっているうち、ある二階窓を指さして（クラスメートの哀らしかった）男の子達が「ボロ家」とか「汚い」とかののりりはじめた。嫌な気分になった。がまんできなくなった。「俺はさ、そういうの聞くの大嫌いなんだ。そんな精神の貧しい、無神経な人間と一緒にいるのがまんできなくなるんだ」と強く言った。男の子達はピタリとやめた。女の子の方をむいてニヤッと笑ったり、ニッコリした。やはり、かわいい子供達であった。「時々先生の祈へ行くよ」といって男の子も帰っていった。

◇ 遠藤先生が501になった。斉藤先生が503になった。遠藤先生は昔から知っていた。前任校の研究会の講師で来たことがあったし、ぼくの親友が一緒だったからだ。斉藤先生のすばらしさは、前の石川校長から何度が聞かれていた。高学年の教育は、けっして学級単独では成立しない。学年チームの内規に規定されていく。（あるん画一にするという意味ではない。）何か、すばらしい学年ができそうを胸がわくわくしている。

et cetera

1975.4.8
No. 2
調布大塚小
5の2通信
学級

出合いの序章 その2 五年二組誕生

- ◇ 担任発表が終って子供達の前に立った。最前列の男の子と握手をした。女の子にもしようとした所、でれてしまって手を出さない。強引に手を出すと「まいっちゃうなあ」といいながら握手をした。ニコッとして、ほくを見た。うしろの方へ行ったら、有の低い男の子が「先生、若くて、かっこいいね」と、しみじみと声をかけてきた。これは赤飯ものだ。この世に生をうけて以来「かっこいい」なんていわれたのは初めてだ。少し話しをしていると、後で女の子が服をひっぱる。「先生、そっちは他のクラスよ。二組はこっちなんだから」といわれる。 「じゃ、又ね」と、有すじを伸ばしてかっこよく、その場を離れた。すいぶんと気分の良い、ひとときであった。
- ◇ 始業式が終って、はじに並んでいた転入生を迎えに行った。宮城君と大河原さんである。「どこから来たの」と聞くと、男の子は「大阪」と答え、女の子は「オーストラリア」と答えた。巻き舌の、美しい発音であった。これで五年二組は、42名となったわけである。

転入生 宮城 亮 池田市立秦野小学校より

大河原香 イーストアイバンホープライマリースクールより

- ◇ 教室での時間は30分ほどしかない。入学式があるためだ。一人一人の名を呼んだあと、質問をうけた。「先生はこわいひですか」と聞かれた。「むろん、こわいひです」と答えた。これも、こわいひがする方なのだ。笑いにつつまれていた教室が、一瞬シーンとなった。「学問に対しては、勉強といわず、あえて学問といいます、学問に対してはきびしいです。そして、人間として

許せぬ事にはこわいぞ」と、つけ加えた。

◇ そして、次のような事を述べた。

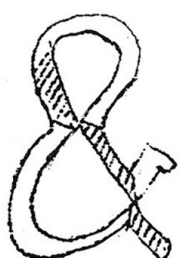
「君達とは、一年間か二年間、生活を共にするわけです。俺と君達との出立にあたって、どうしてもいっておきたい事が二つあります。

君達は、測り知れない可能性を持っています。君達の一人一人がです。自分はだめだとか、できないと思うことはありません。しかし宝石と同じようにみがかなくては、それは永久にあらわれはしないのです。教室とは、そのための場です。教室とは、まちがいをする場なのです。科学は、失敗し失敗し失敗して、その中からやっと成功する事によって発展してきました。それが学問の一つの本質です。まちがいを怖れず、うんと失敗をしろさい。そしてこそ君達は、確かな力を身につけていけるのです。

そうした発展的且人間関係があるために、いっておきたいのが二つあるのです。一つは、先生は君達の間にあらわれる、あらゆる形の差別を許さないという事です。差別はする方もされる方も人間をだめにするからです。先生も差別は絶対にしません。えこひいきは絶対にしません。もし、少しでも感じたら、えんりょなく先生にいいろさい。もう一つは、にせものは許さないという事です。かっこだけつけたり、先生に良く思われようとしたりする事は許しません。本当の努力、本物の自分こそ大切なのです。ですから、先生につげ口をして、他人を悪くいい自分だけ良く思われようとする人なんか大嫌いです。本当に困った時だけ先生の前に来ろさい、あとは自分達で解決するようにしろさい。」とまあ、こんな調子であった。

◇ 「お母さんがね、営繕通信を見て、「面白い顔だなあ」って笑っていたよ」と女のるにいわれた。あの手の顔しかないよんで… どうも。

◇ 前の教えるが千羽鶴を持ってきてくれた。「洋さんが、調布大援けでも、私達のクラスみたいに、すばらしいクラスを創るようにと心をこめて折ったの」という事であった。教室に飾ります。いっか見て下さい。



1975.4.9
調布大塚小
5年2学級 通信No.3

◎日記を月曜日毎に提出
します。御協力下さい。
◎①花びんの不用のがあり
したら、おゆすり下さい
◎投稿を歓迎します。ぜひ
◎文章のからの悪さはお許
さい。人間はそうでもない

出合いの序章 その3 出合い余話

◇ 大そうじなので、Gパン、赤ジャンパー、サングラスで登校した。校門の所で扉門を待っていた子供達に「カッコイイー」といわれた。(相対的に若いというのはいいものだ。その事を前任校の同僚に話したらゲウゲウ笑われた。何せ、前任校には20代教師が20名近くいたのである。六年生の教室へ腹を出したら、とある男の子が、不思議な物体でも見るようにぼくをながめ「この人先生?」と叫んでいた。よほど先生っぽくをしたかっこうであつたらしい。^{<俺もか?>} そういえば、他クラスや他学年の子が教室の前をうろうろし、「先生入っていいですか」といって、ぼくを観察していった。観賞用動物ぐらいの存在価値はありそうだが、それ以上でいいのが無念な所である。

◇ 庄がさっそく将棋を持って来た。休み席間と放課後やった。二枚落ちと六枚落ちである。まろん、ぼくの完勝である。遊びは、めったに事では負けはないのだ。前任校で、けん玉がはやし、一番上手な子と試合をやったのであるが、勝った。百人一首しかり。おはじきしかり。めんこしかり。ゲームしかり。パズルしかりである。次から次へと挑戦者があらわれたのであるが、庄一人で、今日はかんべんしてもらった。他クラス他学年の子も見物していて名をあげているので、ちょっと大変である。

◇ 水ぼうそうで休んでいる鈴木恵子に電話をした。さぞ不安に思っていると思つてである。見舞いに行きたかったのだが、そのほどの席間もとれなかつた。かわいらしい声であつた。お母さんの話によるとどんな先生なんだろうと心配していた

らしい。「みんな待ってるよ」といって電話を終えた。

◇ オーストラリアから来た大河原 香はあもしろい。「先生、大河原さん考飾がわからないうんだった」と他の子が来た。winter, autumn, 毎だと聞くとすぐわかるのである。にこにこしていて、かわいいうのである。すぐみんなとけこんでしまい、他の女の子たちも学校中を案内してあげていた。「筆記用具を持ってらっしゃい」というと、にこにこしてやってきて「先生、ひょうきょうぐって何ですか」というのである。本人は英語の方が話しやすいらしい。今日は前の学校のクラスメイトの写真を持ってきてくれた。

「4年生の時、おきく君のう、女の子がいて人？」と聞いた手をサッと上げていた。この時、手があがったのは、大河原、宮城、他2名である。この二人の転校生は、すぐあで、心があったつである。

◇ 昨日、宿題に出しておいた30秒間の自己紹介をやらせた。「たかが30秒、学校でできると思っているはずですよ。必ず家で練習してきなさい」と強くいってあったのだ。はじめから3人聞いて中止した。家までやってきてないのだ。30秒は大人でも練習しなればできない。「やってきたのか」と聞くと「少し考えてきました」という。こういういいわけがましいのは嫌いだから通す。「どの部分を考えたのだ」、答えは、しどろもどろなのだ。「やってきませんでした」といったるもいた。他の子に「忘れた者？」という10人位立った。「本当だね。うそじゃないな」と強くいうと、又5、6人立った。更に手を押すと、又どろどろ立った。1つきよく忘れたのは多分であった。「あいほど、うそやにせぬのは嫌いだ」といったるう。俺と君達とをつくるこのクラスから、そんな事はないさなければいけないんだ。30秒ぐらいどうにでもなると思った。その心がいやなのだ」とぼくは熱っぽくいった。数壇がピーンとはりつめていた。泣きそうなるも何人もいた。これはいいのである。こうしてこの子達は強くなっていくのだ。ちなみに事前に「忘れた」といってたのは大分であった。

エトセトラ

1975.4.10
No. 4
調布大塚小
5の2 学級通信

出合いの序章 その4 「何しろとってもおもしろいのである。そして、きびしいのである。」 <中谷純三>

<竹田明則>

はじめて、この先生と会った時、ちょっぴりこわいような気がした。名前は向山先生というそう。向山先生は遊びがうまいそう。

この先生が、朝5年2組に元気よく「おはようー」とはいてくると、なんだか胸がすっきりする。大そうじの時は、ジーンに赤ジャンパー、サングラスをかけてきた。こんなにかっこうがよくて、遊びがうまくて、その上どきょうがいい。ぼくは、こういう先生が大好きだ。この先生と話していると、みんなが明るくなる。この先生と遊んでいると何だか楽しくなってくる。とびはこがとべない人に先生がきつととばせてあげるといふ。たいへんいいことだと思う。

<高橋弘一郎>

向山先生の歌は大オウ今だ。だけどいっしょうけんめい歌っている。その大オウ今には聞えてこない。今の世の中に、向山先生みたいな人物は少ないと思う。心の貧しい人がうようよいると思う。

この先生と出合って、何か今までの先生とはちがうようなふんいきを感じました。今までの先生は、勉強だけを教えるだけでしたけれど、向山先生は 本当の人間の心、いや裏の心を教えてくれそうなのです。向山先生がこの組にきてから、学校が楽しくなってきました。向山先生に、これから勉強を教えてもらうのが楽しみです。

＜中原和子＞

向山先生はゆかいだ。はじめに来た時からみんなをわらわらせている。先生が「明日、30秒の自己紹介をやるぞあ〜」と叫んだ。先生がヘンナ声で叫んだ。「ぼくは向山洋一です。31才。二枚目で、暑くて暑くて困っています。…」みんなは大笑いをした。そのあとに先生は「えこひいきは大きらいだ。にせものはいやだ」といっていた。その時の先生の目はきびしかった。母に「先生、遊びは何でもとく意だつてね」と言ったら、「ハエ〜そりゃ良かったね。母さん遊びの好きで先生、大かんがいら〜といっていた。

＜梶 南行＞

ぼくは、向山先生にあった時、あもしろい顔をしているからこわくないと思った。でも、教室に入って、「2つだけいっておくことがある」といってこわい顔をした。しんけん君顔をしているから、何だかあつたかなくなってきた。まじめな顔をしているんだから、ぼくもまじめに先生のいっている事を考えた。2日めは、サングラス、赤ジャンパー、ジーンズをはいてきた。頭が少しぼさぼさなのが気に入らない。ぼさぼさじゃなければ、ほんとうにかっこいいと思う。始業式の日、先生が台の上から手をふった。その時から向山先生がすきだった。めんこもしょうぎもまーじゃんもうまいし文句なしの人だ。これから先生をどんけいし愛していけばいいのだ。

＜嵯 千枝＞

向山先生と初めてあった日、先生には悪いけど「えとせとら」にもあったようにふとっているなと思った。あがあさまにNo1のエトセトラを見せたら笑っていた。テレビでやっている昔の人の言いかたで、話が書いてあったからだ。あとうさまが「文藝がうまい先生だよきつと」といっていた。私もあすが楽しんだ。はやく向山先生に会いたいと思う。アールが昔今ので教えて下さい。一度あったら二度とわかれたいという気持ちになりました。

エトセトラ

1975. 4. 11.
No. 5
調布大塚小
5の2 学級通信

出合いの序章 その5

- ◇ 休み時間 外で遊んだ。30人位で手をつないで輪をつくらせて、たおしっこをするのである。いっせいのせいぞろい。元気よく始まる。ものめずらしいのか、ほかめしている子もある。女の子だって、ほかほかやるのである。終りの方には、他クラスの子も7人入ってきた。輪はいっそう大きくなった。倒されて、みんなどろだらけである。ぼくも、どろだらけである。終って教室へもどった時は、みんな上着をぬいごいた。どの顔も汗がびっしょりであった。
- ◇ オー一回の漢字テストをした。「練習すれば、ひさるようになる事は、必ず手をぬかないように」と強くいっておいたのである。
- 結果は、100点が20人 90点が5人、80点が2人、70点が1人 60点が1人 50点が1人 40点が1人、20点が1人であった。平均点は92点である。
- 今日は、授業のオー一回目。楽しかった。どの子も良く手をあげていた。
- ◇ 昨日、前の同僚と夜桜を見に行った。久しぶりに飲みすぎて、今日はいささか二日酔気味であった。酒飲きたるもの、酔って倒れた翌日は、はっでで職場に行かぬばならぬ。子供達に言ったら、「とてそんなふうには見えはいよ」と言っていた。子供達と遊んで汗を流したらサッパリした。授業も、一段と熱が入った。授業の感想を、子供達に聞いてみて下さい。
- ◇ 出合いの序章は 今回で終わります。それでは、みなさん、よろしくお願ひします。(エトセトラに、ぜひ投稿して下さい。名を貸させてあげようぞ。)

日記

中谷純子く4月9日

先生が日記の文章を書いた。こういう文である。「今日、朝七時三〇分に起きた。」大河原さんが「三〇分」の〇を十にしたらといった。すんくんが「今日はいいな」といった。私はだまっていたが「あんな文は日記にかかなくていいなあ」と思った。私の思ったことは、あった。

今になってみると、発言しなかったのがあしい。私は見かけによらない内気で、あまり発言しない方である。3時固目、算数の時間だった。そして〇について勉強した。〇の意味は三通りあった。何もないということと、数のきじゅんと位どりである。あと、二進数と三進数を勉強した。とにかく、今日は楽しかった。こんな日がいつまでも続くといいなあ。

今日の休み時間、ひまわりやひまわりおすのをく名はしらないをやった。ほんとにあもしろい。ひさしぶりに汗をかいた。

外川幾朗

始業式の時、新しい先生のしょうかいがあった。校長先生が「向山先生です」と言った時、先生が手をふった。おもしろそうな先生だなと思った。

まさか向山先生のクラスに居るとは思っていなかった。「5年2組、向山先生と言った時、びっくりした。こっちへ来てニコッとした。いい先生だなあという感じがした。教室へおどって先生が話しをした。「先生は、ぜったいに差別をしない。みんなが差別をする事を許さない。また、うそやにせものはきらいだ」と言った。なるほどと思った。あまりあこらない先生だし、じょうだんを言ったリして、とてもあもしろい先生だ。家に帰ってその事を言うと、母は「いい先生だね」と言った。次の日先生は、赤ジャンパーでジープンサングラスを登校してきた。カッコいいなあと思った。〈以下略〉

エトセトラ

1975. 4. 11
No. 6
調布大塚小
5の2 通信
学報

（お母より）〈A君の母〉

エトセトラを見まして、感心したり、ニヤニヤしている私をみて、娘が「あ
母さま〃よくまあ、エトセトラをみていろいろ言っているけど、何か感想書
いて、一寸面白いのヨ」といいました。「まあ、一言ぶよいほら、良い先生
にあたったということです。（先生、ごめんなさい。）

春休みボケの娘が、向山先生との出会いで、すっかりシャンとなり、「これか
らの授業が楽しみ」と期待しております。

- ◇ 直接よせられた、初めての反応である。何人かの子どもからは、「いい先生
だから、しっかり勉強するのよ」といわれにやと聞かされていた。
ありがたいことである。ぼくなんか、欠陥ばかりあって、ところ「あたった」
といわれるような人間じゃないことを、充分知っているからよけいそう思う
のである。子ども達に、そういつてくれれば（内心く何よ今度の先生、へんで
おかしいわねえ）と思っていても）、子どもは期待を胸をいくらますし、教師
様世のぼくは、「この恩（義理？）を、返さなければ、授業の道にはずれます」
なんて、その気になってみたくなるというものである。

- ◇（先生、ごめんなさい）と、A君のお母さんは言っているから、〈当り〉〈は
ずれ〉なんて、失礼なのを、万々、承知なのであろう。しかし、教師のあた
り、はずれとは、良く耳にすることはである。

教師様世のぼくに言わせれば、親の当り、はずれもあるのである。（お母さん、
や、ごめんなさい。）（ぼくは、これでも、ちょいちょい居直る方だから、A

るのお母さんにのせてもらって、いってあきにいのだ。(実は、前から考えていた事であるが)、子供のために、いっしょうけんめいやっている教師に水をさし、ダメにしてしまう親めいれば、欠陥が多い教師でも、やる気にさせて、すばらしい教育をさせていく親めいるのである。

むろん、ぼく達は給料をもらっている人間だから そんな事にあさあさ心を動かされてはいけないうのだが、こういう事もあるのは事実である。「教育委員会へ電話します」なんてあどす人めいるのです。もし、ぼくだったら「どうぞ、どうぞ」といって、内心く月給分働らきゃあいいいんだろうなんて居直るのである。

◇ もっとも、ぼくの欠点をく山ほどあります>目をつがってくれなんていいません。そんな事をしたら、何より子供が不幸なのです。しかし、欠点に見える事でも、ぼくなり教育主張があるのかもしいいのです。く5の2には43通りの教育主張があるのです。実数数十教師>

ですから、そういう時は、まずぼくに言って下さい。ぼくも人間ですから、カチンとはくると思いますが、しかし、絶対に、あとへはひかせません。もし、ぼくに言いにくいのなら、学年主任の斉藤先生か、遠藤先生の方へ行って下さるようお願いします。この方達は、名を伏せて下さいといえれば必ずそうしてくれします。ぼくも、この二人の言うことなら、すほかに聞けます。

◇ 大皿小を転任するにあたり、多くの親が送別会をひらいてくれた。ぼくのためにである。六十余名という盛大な送別会もあったし、十名位の送別会もあった。「先生、もこうへ行ってめかんばってね。でもね、本当をいうと、調布大塚小の親に先生をとられそうさ、やきもちをやいてんの。いやになったら、いつでも大皿小へ帰ってきてね」と言われた。ありがたい事だと思った。ぼくは、親にあたったのである。こうまで言われれば、馬鹿の一念、やってやろうという気にもなる。くでも、親にどういゆめようといいいのである。それは一つの条件にしがすぎない。やはり、子供が問題なのである>

エトセトラ

1975. 4. 12(土)

NO. 7

調布大塚小
5年2組 通信

〈約束通り) とび箱を全員とばせました。〉

上田尾 久美く私はうれしい気持ちがいっぱいです>

はじめにとび箱に、まねがドキドキした。一番はじめにとんだ時は、おしりにつかえとべなかった。もう一ぺんやって、その時にとべなかった。その次に何ぺんもやって、やっと五回ぐらいとべた。私の気持ちは、とてもうれしかった。みんなの前でやるのは はずかしかった。けど、私はいっしょうけんめいやった。向山先生も、私やほかのとべない人に いっしょうけんめい教えてくれた。

先生のいった通りにやれば とべたんだ。まだ、できないものがあるけれど先生のいうとうりにやれば、きっとできると思う。私はうれしい気持ちがいっぱいです。先生、ありがとう。

◇ この、ひしひしと伝わってくる喜び。自分にとって、どうしてもめだと思っていた事を、のりこえた時の、この夢のふくらみ。

そして、彼女はいふ。「(私には) まだ、できないものがあるけれど」と。しかし、今迄とはちがう、胸をはって、確信をもってこう言ってるのである。「先生のいうとおりやれば」きっとできると思う。」と。

生れてはじめて、とび箱をとべたこの喜び。そして、つかんだ困難を克服する事への確信。別に、とび箱であろうと、他のことであろうと何でもよいのである。ささいに見える事の中にも、教育的に価値があるとの好例である。他の子どもも、あどろきの目を見ていた。拍手が大きかった。

◇とべほいろが あと二人いた。佐藤美由紀と大河原 香である。佐藤は4年の時、4段までしかとべなかったらしい。大河原は、生れてはじめてやるのである。とべたことで、美しく、流れるようにとべたのは一人ぐらいしかいなかった。とべればいいと思っているるもいるのである。全体の流しが無理なく、すなわち、従って美しいフォームでとぶには、もう少し時間がかかりそうである。とび込み前転、台上前転ほどの高度ほどのへ行くためには、しほしの時間が必要のようである。

大河原 香

はじめて、飛ぶばこが飛べて、わたしはとてうれしかった。向うの学校では、飛ぶばこはありません。今日、はじめて飛ぶばこを見たのです。飛ぶ時は、とてもこわかった。さいしょは、じかどきどきしていましたが、先生が手伝ってくれました。そして、わたしは飛べました。こんどから、もっと、がんばって、きれいに飛べるようになりたいと思います。

佐藤美由紀

私は4年生の時、4段が飛べたけど、5段が飛べたのははじめてだ。4年生の時、5段が飛べない人の中に入っていた。

5年生になって、向山先生が「ぜったい飛べる」と言った。わたしは、5年生になっても飛べないなんて、はじだと思った。先生が手伝ってくれて、がんばってやったら、やっと飛べるようになった。飛べた時は、とてもうれしかった。

(もろもろの事)の今日の学校の目標は、持ち物に名前を書きましょう。です。すべてに名が入ってるかどうか、一度確かめて下さい。

②自分のどうきんとめておく、洗たくバサミを持ってきてない人がまだいます。自分用のどうきんが毎日あります。

③今日、土曜日、前任教(大田小)の離任式のため休みます。他の先生が来て下さいます。月曜日、日記を忘れぬようにさせて下さい。

エトセトラ

1975. 4. 14
No. 8
調布大塚小
5年の学級通信

◇日記未読者
4名あります。

◇今週、保護者会
です。お会いでき
るのを楽しみにし
ております。

これでも応えねば、親の仁義に反します<B3の母>

◇エトセトラNo1: 向先生にもらったの? “新しいカッコイイ先生よ。はいこれ!。これが向山先生との最初の出会いである。仲マセンスのある、威勢のいい先生の様だ。幼稚園から一年へ四年迄、ずっと女の先生とばかりつき合ってきた。父親のいい娘にとって、男らしさ、男性の雄々しさ素晴らしさを知って欲しいと願う。「出会い」の真の意味の未だ理解できないう娘が、成人して懐しく思い出し、真の「出会い」の意味が解る迄、このエトセトラを大切に持って置いてやろうと思う。

◇エトセトラNo2: 週に一度ぶち嫌しいと思っていたのが、毎日とはありがた。先生の御努力は大変だろうと思い、仕事の忙しさを口実に、年に一、二回しか学校へ行かない非教育(寧ろ)ママも、この先生には、大いに期待を抱いて、一昨日迄、塾へ行った方がよいのかと悩んでいたのもがっ飛び込んでしまう。勉強だけでなく、学問する態度、生きる事の素晴らしさを子供に教えて頂ける様な気がして、人生にやさかくたびれた母親は、肩の重荷が半減した様に、軽い気持ちを抱く。

◇エトセトラNo3: 剛速球を全力投球させる先生の球を受け止める下地が子供達に未だ出来ていない様に思う。この二年間、先生の投げる球を受け止め、投げ返す力をきとつけて欲しいと願い、大人の世界の入り口に立ったこの年代に、向山先生の様と大人に出会った事は、子供にとって(母親にとって)何と幸せな事だろうと思うのです。

◇エトセトラNo.4: ^娘“ママ、又転んじやった。” ^母“消毒して薬をつけなさい。エトセトラは?” ^娘“痛いのですとって。” ^母“消毒すればひとりでに治るわよ。エトセトラ、早く出しなさい。” ^娘“娘が痛がってるというのに、もうエトセトラ見せない。”

◇エトセトラNo.5,6: “今日は二枚よ。明日先生は前の学校へいっしょにしゃるから、向山先生の口調を借りて云えば、“これで先生の呼びかけに応えれば、親としての仁義に反します。”というものである。毎日、針は持っていて、原稿用紙を埋める事など、何十年ぶりかであるから、思い溢れてペン進まずである。先生への賛辞ばかりでは、先生が気はすかしくなっていて、エトセトラが頂けないと淋しいのを取えて一言。『いやになっただけで、大皿川へ帰って来てね』と言われたとか。調布大塚川の親とは一度の対面もなく、居直るのは、ちと短気に過ぎると思いますけど如何でしょう。

◇エトセトラNo.7: “今日は先生は来られなくて、エトセトラは来たよ。先生、頑張るね。(先生、書く事がお好きなのね)、書く事の苦手な娘の心の中つぶやき。この先生のもとでは、作文の苦手な娘もきっと書く事が好きになるだろう。

◇向山 *etc.*

◇ありがたい事である。いそがしさと文を書く苦痛をこえての投稿。感謝します。本当に!。(ほとんどの家庭で、エトセトラをファイルしてあるとか。自分の未熟さだけが残るように取っかしのですが、でもこれは、ぼくたちだけのミニコミです。前任校の学級通信も、そうされていたみたいです。

◇エトセトラは発行部数 約100部です。購読申し込みはあつとあるのですが、かんべんしてもらってます。内わけは、調布大塚父母42名、教師10名、大皿川教師10名、山王、赤松、矢束等区内の教師20名、旧父母11名、他府県5名(幼小、大、高) 保有用5部です。紛失されても予備はありません。

エトセトラ

1974. 4. 15
No. 9
調布大塚小
5の2 学級通信

◎お母さん方は
本日二重の厚
がありました
◎教室に、カ
お花がふえ
た。

日記 陶山義孝

- ④ 日記を返してもらった。すぐ返事を見た。どういことが書いてあるかな。
注意のことか。など始めはこう思った。

見るとやっぱり注意のことだった。でも最後に、立派だと書いてあった。(ぼくは、うれしくて、うれしくてたまらなかった。それは、向山先生に、初めてほめられたからである。注意の所を気をつけながら、きょうは書いたつもりである。ぼくの楽しみは一つふえた。それは日記を書くこと。もう一つは向山先生の書いた日記の返事を見ることである。

日記を読んでいると、一日の反省ができる。日記を書いておくと、いつまでも思い出として残る。でも、日記でも書きたい日と書きたくない時があると思う。そりゃあ一人間だもん。でも、それを毎日するのが努力だ。その努力を続ける一つが日記である。

- ◆ 日記を書かせる目的はいろいろある。しかし、その中で (ぼくにとって大切なのは二つである。オ一は、子供のさまざまな生活を知りたいという事だ。そして、オ二は、そうした子供の生活に、(ぼくも)かかわりたいという事である。いうなれば、(ぼくと)子供との絆であるのだ。この二からは、低い位置になるが、更にいうならば二つある。オ一は(つまりオ二は)、ものを見る目、考える力をつけてほしいという事である。人間は頭で考える時、言語の形で考えている。その思考の言語を文という言語にする時に、整理したり、深めたりする操作が行われるのである。つまり 思考の言語と文の言語が豊かになればいい文は書けるし、逆に文を書くことはそうした事を豊かにし

ていくのである。カニは(つまりカニは)毎日毎日、一定の努力をする習慣をつけておきたいという事である。それは 人間としての支能の中で、特に大切なものだと思うからである。だから、ぼくは、日記指導の中で字のまちがいの注意ほど (ほとんどしない)。42人のすべてに そんな注意ができない事にもよるが、何よりも、ぼくの日記指導のねらいから、はすしているからである。(国語の授業では、もちろんやります)。字のまちがいばかり気をとられて、思った事がすなわに書けなかったら、大きな損失だからである。

◇ ぼくが 日記に対して書く、注意は次のようなものです。

イ、毎日書きなさい。 ロ、もっともっと長く書きなさい。

ハ、あれこれ書かないで、一つのことをくわしく書きなさい。

ニ、ていねいに、心をこめて書きなさい。

ホ、自分の考えを、書くようにしなさい。

陶山の日記は、その点 すばらしいものの一つである。ささいなほめことばでも、これだけ喜ぶ感性の豊かさ。そして、それか又、次の原動力になっているのである。だからこそ、ぼくの注意にも、心からうけとめ、細心の注意を払う。文庫をいくらはおしてあげても このようには変化していかないであろう。ちなみに、冬への陶山への返事は次の通りであった。「きちんとした文です。表面的なことをほざいた感じがして、少しもの足りませんが…。一つが二つのことを、くわしく書くのです。でも、立派です。」

◇◇ 昨日、子供達をぞろぞろみきつれて、学区を見物した。ジープンスタイルの人相の悪いのが、かわいらしい子供達を連れてくるから、ジロリとほがめられるのもあった。くみの人変ねえ、ゆうかい魔じゃないかしら、それにしちゃあ何人かついていってほんて思った事だろう。道すがら、初ちゃんのおばあちゃんとすれちがったが、すれちがってから子供が知らせてくれたので、あいさつできなかった。小泉のお母さんとは道をへだててあいさつした。小泉のお母さんには「もしかしたら先生じゃないかと思ったんですよ。子供の人気がすごいですね。エトセトラ楽しみにしています。」といわれた。うれしかった。

エトセトラ

1975.4.16
No. 10
調布大塚小
5の2通信
室で長

○明日、保護者会です
○歯の検診終了した。
虫歯の人は、早めに
直して下さい。
3年間放置している人
もいます。

父母より A男の母 4月15日

初めまして。毎日楽しく拝見いたしております。A男の母親でございます。
A男は、2年の12月に父親を失いまして、もともと人なつっこい子供はござい
ましたが、それ以来、男の方におこられた事がございません。
何事につけても、男の人の持つ厳しさを知らせたいと存じておりました所、
はからずも此の度は、向山先生に受持っていただく事にあり、何よりと存じ
ております。A男は、何につけ他が本願の所が多く、一つ一つの事に集中し
て全力投球がぶきずにあります。どうぞ先生から、男の人の物事に対する厳
しさを会得出来ましたら、この上なほ幸せと喜びます。
エトセトラNo8のお母さんと同じく、四年生迄ずっと女の先生に受持ってい
ただきましたので、今度は男の先生ですのを親るる期待に胸をふくらませて
あります。

この様に、お勉強より遊びの方が一生懸命の息子ではございますが、どうぞ
よろしく御指導の程、御願い申し上げます。

今日もA男が帰ってくるなり「向山先生が」明日は家庭科がある。ウッ
ッシとあっしやった」と申しておりました。何ですか、私迄、楽しくあり
ました。では、保護者会をお会い出来ます事を楽しみにしております。

B男の母 4月15日

「お母さん、はい、これ、エトセトラ」と言って目の前に出されたので、何
かと思い、子供に聞いてみまると、説明してくれました。

今迄、通知書をあまり見せなかった我が子ですが、毎日テーブルの上に置いてくれます。そして、最初に我が子から聞いた言葉は「ぼく、これ、大事にとっておくんだ」でした。その一言を聞きまして、先生の暖かい人間味が子供の心にかよい始めたと、うれしくなりました。一年間、希望に胸をふくらませて、子供を見つめて行きたいと思います。

ざれごと 1

前任校でPTAの会長さんと、したたかに酒を飲んだ事がある。酔うてはいいたが、その時の彼の言葉を今も忘れない。「向山先生！先生だからいうけどね、酔っちゃったからいうけどね、初めて担任がわかるまでは、親としちゃあどこの馬の骨かわからぬ人間に大切な子供を預けるかと思うと心配で心配でしようがないんだ」と話したのである。

その時から、ぼくは、親にとって教師は“どこの馬の骨かわからぬ”という面がある事を、さきに命じようと思った。子と親との絆に比べれば、教師はぞ人生の一時期を通過するだけの、代替可能な“馬の骨”なのだと思った。ぼくの心にあった思いあがり、ごうまん いやらしさをもう一度、洗い流さうと思った。（その子供の担任ではなかったが）

ぼくだって男一匹、あらゆる未来に対する可能性の中から、教師を選んだのである。教師職業は、ぼくにとっては、人生そのものなのだ。

“馬の骨”にしかすぎないのかどうかは、長い時間をかければわからないであろう。50年後にわかる事だってあるのである。そして、事実、多くの子供は、どんなにすぐれた教師であっても、そこを通過していくのである。想いを時代のかたに置き去っていくのである。そうであれば、子供は成長していかなければ。だから、ぼくは、教師とは空しいものだと思うのである。空しさが教育の本質だから、よけい空しいのである。しかし、やはりぼくは、そうした空しい営為ではあって、自分の人生を賭けてみたいのだ。

エトセトラ

1975. 4. 17
No. 11
調布大塚小
5の2 学級通信



A男の母

「えとせとら」を、毎日心待ちにしています。出会いから、度肝をぬかれてしまいました。こんな先生は、現実には皆無と置いていたからです。

ですから、向山先生には、絶大なる期待をかけてしまいました。若し、私共に 協力の出来る事があつたら、何でも言つて頂きたいのです。

例えば、毎日100部を製作されるという。1ヶ月で、紙だけでも2500枚は必要。その費用は、原紙代は……。5年2組だけが、そんなに消費していいのでしょうか。みんな、力を合せて廃品回収も一案ではないかしらと思うのです。

◇ 校長さんと読者で、教頭さんと読者であるが、「紙が不足するよ」と言われてはいから大丈夫なのだと思う。「あの先生、紙ばかり使つて」という声も聞いた事はない。もっとも、5の2以外の読者には、「紙パニックになったら月ぎめ300円だぞ」と言った事はある。「いいよ、いいよ払うよ」と、みんな笑つていつていた。坂本先生など、「ボクが代理店をやつて、手数料を取る事にしよう」と、金儲けを考えていた。きっと、ビルでも建てる資金にするのだ。

◇ 外様気分もやつとぬけてきた。「将棋クラブ」を新設してもらいたくて、「ぼくは、最近調布大塚の教育に命をかけるつもりでいますから、ぼくが冠

る限り、必ず特権クラブの指導をやりますから、承認して下さい」といった所、みんな拍手を認めてくれた。

でも、あとがつけなかった。大塚の教育に命を賭けるといったのを、たてにとられて、ずいぶんといじめられた。

- ◇ 教職員の歡送会のあいさつの中で「ぼくは、調布大塚の女の先生が、意外と魅力的なのよ、ホッとしているのよ」とやった。意外とは というのは、来る迄は、おそろしいおばちゃまばかりを想像していたからである。そして、「今の所、一番すてきだと思っているのは、有藤清るさんです」と、やったのがつけなかった。がわいく、おしとやかなぼくは、いびられてしまった。言ったとたん、みんなは拍手と笑いをつつまれ、「有藤さん、ずいぶんゴマすられたねえ」と声がとび、本人もゲラゲラ笑いかから「すられたちゃったあ」とやっているのである。紙情なぼくは、返す言葉がなくて、オロオロしてしまったのである。何せ有藤先生は、おそろしい学年主任なのだ。ちょっとは今かげんしてもらおうとして、いった事がこうあからさまに見すかされちゃあ立場がないというものだ。でも、すてきじゃほい人を、すてきだなんていうほどぼくは世なれてないから、言った事は本当なのである。Noriにも書いた通り。かよわい男心をくんでくれてもいいじゃないか。ねえ、みなさん!!

- ◇ 楽しいひとときであった。学年の3人でも話しあえたし、若い人達と、がんばろうよと話しあえたし、いろいろな人の良さを見つけられたからである。あいそ先生や、福田先生や、伴先生にも、はげまされた。大塚小の仲間とともに、がんばっていきたいと思う。

そうそう、教頭先生の趣味が囲碁だそうよ、今度おちあわせをする事になった。

etc.

1975. 4. 18
No. 12
調布大塚小
5年の2
学級通信

別れがあるからこそ、人の世
は美しく
出会いがあるからこそ、人の
世は 素晴らしい。
く大塚小卒業生への別離の詩²¹より

親との出会い。

- ◇ 30名の母親の出席で、オ一回の保護者会は開かれた。「お母さんね、すごく
いそがしい仕事をかかえてるんだけど、どうしても先生に会いたいんだって」
「先生、大丈夫？ ママの方がそわそわしてるよ」等と知らせてくれる子供達
もいた。ほんと、何となく心が落ちつかなかった。
- ◇ ぼく自身の教師としての生育歴、教育観、学級経営の方針に寄せられた圧倒
的な支持にほっとしている。迷演説にもかかわらず、よく理解してもらえたと
感謝している。大塚小での7年間で、より子供にとって価値ある教師にほりた
いと共闘した日々が、まだぼくはなかったと思っている。大塚小で、苦楽を共に
した数十名のかつての仲間と（そのほとんどは青年教師であった）、今のこの
春こみをおちあいたいと思っている。ぼくは、大塚の教育に命を賭けるつもり
だが、その原動力が大塚にあることは、まちがいのない事実だからだ。
- ◇ 聞きながら、顔が赤らんでしまうような支持ぶりもあった。「エトセトラの
内容が素晴らしいけど、話しの方がもっとすばらしかった」〈篠〉「私が考え
ていた理想の先生以上のので感激している。」〈大河原〉「新聞などを見て、今
の教育に失望し、期待もしていなかったが、今後は大いに期待していきたい」
〈篠原〉「すべてに感激し、すべてに共鳴している」〈高橋〉「すごいエネ
ルギーで、偉大なマグマという感じを受ける」〈中谷〉「努力家であり、勝が
大きいと思った。こういう先生もいるのかと思った」〈橋本〉「素晴らしい先
生にめぐりあえた事を喜んでいる」〈竹田〉

- ◇ こんなに価値ある教師でないことを、自分が良く知っている。わずかにミリの成長ひさえ、そこにはものすごい努力と苦心が必要であることを、ぼくは良く知っている。エトセトラだって、いつまでは続かない事を良く知っている。〈自分の目標は100号ひす〉そして、教育とは、とりわけ学校教育とは、各校教師集団、学年教師集団の支えがなければ、成立しない事を良く知っている。「もし『エトセトラ』なんか出してはダメだ』という人が一人ひいれば、ぼくの実践は大きく、ゆがんでしまったにちがひない」
- ◇ しかし、そうした事を、あえて知った上で、この過ぎた期待に、ぼくは（あえて、ぼくは）、答えていきたいと思う。超人的な、天才的な人間にしか答えられないこの事を、凡人中の凡人、凡人中の凡人のぼくにできる事は、はなからわかっている。しかし、それを追い求める果しのない過程こそ、教育だと思ふからである。多大な努力の中でうまれる、かすかなく目にさえ見えなひかすかな変化こそ、教育そのものひあると思ふからである。そんな空しさを求めていく事を、ぼくは家業に選んだのである。
- ◇ 「エトセトラは家族中ひ読読者です。主人ひ娘ひ」〈徳田〉とか、「子供が出す前に読んひしまって、再び読んひいる」〈小岩〉とか、「二回ひ三回ひくり返して読んひいる」〈高橋〉「エトセトラを楽しみにしている」〈鬼木、上田尾〉とか、エトセトラの好評ぶりひ話しに出た。
- ◇ 保護者会、最後のあいさつを再録する。

「ぼくは、担任すると『大切なあるさんをはかりにお預りしました』というのひ例ひした。しかし、今度はいえなかったのです。こわくて、取ってぐわいそうな気がしたからです。今日、み母さんのお話しをうかがって安心しました。オ一回の保護者会を終えるにあたり、ぼくは、心からいわせてもらひます。「大切な、本当に大切なあるさんを、向う一年間、確かにお預りひたしました。」

学年だより 第5学年 4月号

○学習予定（だいたいのめあすです。クラスにより多少のちがひがあります）

	教材	学習内容
国語	・白いぼうし	・朗読をくふうし、味わいを深めることができるようにする。 ・表現の美しいところをとり、味わいを深める。 ・文学的なかおりの高い童話を読み、豊かな心情を育てる。
	・道路と相母 ・書く手がらを整えるには	・ねらいに合わせて事柄を整えて書くことができるようにする。 ・文章の組み立てに注意して書くことができるようにする。 ・ものの見方、考え方を深めるようにする。
社会	・日本の国はと産業 ・いろいろな産業の結びつき	・東京に送られてくるみかんを通して、みかんも各地の産業と結びついて人々の生活に役に立っていることをとらえさせる。
	・わたしたちの国土	・わが国は温帯にある島国で、気候も変化に富んでいる。地形も山地の多い複雑な国である。ここで営まれている産業は、国土のようすと深いつながりをもっている。 ・土地利用や人口の分布と国土のようすと深い関係があることを理解する。
算数	・十進数 ・三角形	・数字と小数点を用いて十進表示の理解 ・乗除法で、末位に0のある計算の簡便法 ・三角形の内角の和が180°であることの理解 ・三角形のかき方の系統的思考 ・三角形の位置関係の理解
	・問題(1)	・二次元の表の見方と読み方 ・4区分のテープ図で示された集合の問題
理科	・動物の成長	・魚やカエルの産卵や成長は、水温やえさに関係があることを理解する。また、魚やカエルは卵から育つが、育ち方には違いがあることを理解する。
音楽	・春の風 ・弦楽セレナーデ	・なめらかな発声で、曲想を生かしながら歌う ・第1主題をおぼえ、曲の変化に注意しながらきく。 ・たて笛や鉄琴でリズムに注意し、歌を生かすようにくふうして演奏する。
	・四 ・五	・リズム感のある構成、動きのある構成、目的を持った構成を考え、切り紙などを用いて作る。
工芸	・立体構成	・つり合いを考え、美しい形の立体を構成する。
	・わたしたちの家族	・家庭科を学習する意義について、 ・家族には、それぞれの立場と役わりがあることを理解させ、協力と責任をはたすことの大切さを自覚させる。 ・家庭における役割分担のようすを調べ、家族の一員として、家庭生活をよりよくするため、自分のたいとにふりて考える。
体育	・マット ・とび箱・鉄棒 ・短距離走	・開脚後転 ・腕立て開脚とび（リズムカルにとび）・さかあがり ・スタートの練習・クワダークスタート・途中の姿勢
	・道徳	・互いに信頼し合い、なかよく助け合う、〈新班長不信任案〉 ・4月生活目標〈たのしい学級をつくる〉

- 5年1組 遠藤正昭
- 5年2組 向山洋一
- 5年3組 斉藤清子

この1年間、上記の3名が第5学年を担当することになりました。保護者会で挨拶はいたしますが、私たち3人は、それぞれクラスの担任であることは勿論ですが、同時に5年生126名の学年の担任として、すべての子どもたちを指導し、見守っていくことを確認しあいました。5年生となると委員会活動にも加わり、上級生としての自覚も出る頃となります。堂々と意見がのべられ、判断力をもち、進んで行動できる気迫のある子どもを期待しています。学習も言われてからやったり宿題にたよるのではなく、課題を見つけて行なうようになってほしいものです。指導についてのご意見を、保護者会または、折りにふれお寄せください。

行事(学年関係のみ)

16日(水)・学級委員紹介	22日(火) 集金日 (給食費、教材費)
17日(木)・保護者会 5・6年	25日(金) 新入生を迎える会
18日(金)・児童代表委員会	26日(土) 校外班編成
24日(月)・児童代表委員会 運営委員紹介 ・家庭訪問はじまる。	〔定期健康診断のスケジュールは学校よりのプリントを見てください〕

集金 教材費 1210 円

22日の集金日に集めます。

内 訳

国語ワーク	100.-	社会科資料集	290.-
社会ワーク	100.-	社会科作業帳	150.-
算数ワーク	100.-	家庭科ノート	120.-
国語ドリル	120.-	書き方ノート	110.-
算数ドリル	120.-		

- 5年生になり6時間学習の日が多くなりました。まだなれないせいか、午後の授業があまり元気かないようです。また、1校時に、大きなあくびをする子どもを見受けられます。健康管理とともに、きよく正しい生活と、じゅう分の休よくをとるよう心がけたいものです。

- 17日は保護者会があり、その後PTAの委員選出があります。欠席されても委員をお願する場合もありますので、よろしくご協力ください。

スナイパー

1977. 4. 6

No 1

調布大塚小5の1学級通信

出逢いの序章

その1く手前、教師廃世を職業といたします。>

◇ 質問1「奴の略歴は？」

昭和18年9月15日、旗、台生れ。旗、台小 荏原五中、小山台高
東営大卒。妻あり。ろなし。太森才皿小。調布大塚小で。経験10
年目。前6年2組担任

質問2「奴の風ぶうは？」

身長176cm。体重78kg。太め。視力左右ともに0.3。眼鏡を常
用し。矯正視力左右ともに2.0。仮名はタヌキ。自称アランドロ
ン。(アランドレではない)

質問3「奴の長所は？」

語るに足るものはないが。しいていうならば執念。

質問4「奴の短所は？」

自己陶醉するほどのうぬぼれ。自信過剰。低俗趣味。喫煙・飲酒
過多。一しかやらないのに十を言う。自分の弱点への甘さ。だら
しがりないこと。不注意なこと。ごうまん無礼。

質問5「奴の教師の腕は？」

未熟。あんた奴が担任に付った事に心から同情する。

質問 6 「奴の教育信条？」

これだけは人並にどさっとある。

- A. 「ひいき・差別が存在する教室での『教育』は、教育ではない。それは口先だけで、なくすることはできず、教師が必死になってなお、存在するほどの強固なものである」
- B. 「すべての人間には、限りない可能性がある。それを信ずる頑固さにおいて、それを具現化する執念において、自分は他のいかなる人よりも劣りはしないと信じる」
- C. 「教室における平等とは、どの子どもともいなく「先生は私をひいきしてくれだ」と思える状態を創ることである。」
- D. 「教育とは、何かを創造していく、可能性をみきだしていく、斗いである。のんびんだらりとやったり、情性をやったり、形式的にやったりしてできる代物ではない。何もないと思える所からでも、何かをひっぱり出すような、極めて激しい斗いである。
- E. 「教育とは、教師と親と子どもとが 連帯してこそ成りたつものである。〈先生にあまかせします〉は、結果として教育の放棄である。」
- F. 「学習は、正直さ、誠実さがあってこそ、権力的に伸びるのであるが、(いわゆるく優秀生)は、この二つが普遍は欠如している。(いわゆるく優秀生)の学力は、普通は質が低く、発展性も乏しい。教室を支配するそうした質の低さの否定から、教育は出発する。」

すなはいはあ

1977. 4. 7
No. 2
5の通信

出逢いの序章 その2

- ◇ 前号に、「ぼくは教師職世を職業としている。」と書いた。こういう、ヤフザ
他人向が嫌いな人の為、に、少々くどい説明をつけ加える。
ぼくは「子供が好きである」「子供の為になにかしてやりたい」というような
考えで教師になったのでもなければ、現にそういう考えで教育をしているの
でもない。極端に言えば、そういう考えは全くないし、そうした優美な考え
方も嫌いである。
- ◇ 教師になったのは、自分自身のためである。他のいかなる職よりも、教育
という行為が、ぼくの生きている証しを刻んでくれると思ったからであり、
自己の存在感が実感できると思ったからである。そうした自己の生きている
証しを刻みつけることが、結果として、子供に良かった場合もあるかもしれない。
しかしこの「原因」と「結果」は逆転できるものではない。同じよう
でいて、全く非なるものである。〈りんごが食べたから食べる〉のと、〈
健康を維持するに必要だからりんごを食べる〉ぐらいのちがいはある。
- ◇ そもそも〈職業〉が楽しいなんてのはめったにない。囲碁と将棋を楽しい
ゲームだが、それを〈職業〉としたら話しは別だろう。〈好きではあるけど
苦しい〉と、棋士は一様に述べている。これは、どんな〈職業〉でも同じだ
ろう。〈好き〉ではあるし〈楽しい〉ときもあるにちがいないが、〈苦しい〉

と思う方が多いにちがいない。その職に徹せれば徹するほどそうであろう。芸とか腕とか技術とか専門とかは、そうした中で少しずつ創造されてきたものであると思う。楽しいのは アマチュアのうちである。プロにすれば、話しはちがってくる。

◇くたび箱のとべりるだけを集めて そいが30人までなら、15分で30人全員をとび箱がとべるようにしてやる> こんな事をほくは良くいう。実演してみせた事もある。これがプロの腕であり、どれほどスポーツの得意な父が、どれほどの専門をかけてもできるものではない。クラスの中で、何かを教えて、6割、7割までなら父でもできよう。く大体できた。教育なんてちょろいものだ>と思いがちである。ところが それから先が大変なのだ。困難は幾何級数的にふえる。前のクラスで38名全員を、25m以上泳げるようにした。残りの1名2名は、36.7m教えた総量より専門と努力と腕と必要とする。しかし、そうした厚い壁を越えた時こそ、越えた本人も見ていた人間は、人間の可能性の永遠なるを実感でき、困難に挑戦する意欲と生まれるのである。

◇ 前号の見出しの<手前、教師度世を稼業といたします>は、そうした内容をこめて、書いたものである。

◇ スナイパー<sniper> 狙撃兵の意である。ターゲット(標的)は何か。自分自身と教育の実態すべてである。ほくは、弱く、甘く、未熟な教師だ。その自分の弱さを射撃ける事こそ、この稼業で度世する自分に課した責務である。どの稼業とそうであるように、教育も又、多くの俗人がラクタと少数の珠玉から成り立っている。従ってほくは、教育の実態を、そのすべてを、(自分自身を含め)まず疑がってみる事になっている。

すなはいばあ

No 3
1977.4.17
5の通信

出逢いの序章 その3 <開幕のドラマ>

◇ 始業式が終って教室に入った。始業式の時、しきりに穴を掘ったりしていた男を、4・5名を立たせ、そのだらしないさを批判した。伊藤・竹山・芝原の3名を次に立たせた。この3名だけが名札をつけていた。出逢いの時に、名前を覚えるのに必要なのだ。その3名をほめくそいであたりみえだといふ。残り全員を立たせた。新学期の出逢いに、「諸君がそんなに敏感で、無神経なら、俺はこの3名しか名前を覚えたい」と、きびしく言った。教室はシーンと静かになった。竹山に号哭をかけさせ、あいつを立たせた。俺の顔を見ながらニヤニヤして礼をする無礼者のや、まだ終わぬうちにすわってしまふぞ、とかしいのがいたから、何度かやり直しを命じた。

◇ ついで、要旨次のように話しをした。

「俺と一年間はつきあう運命にあって、内心いやな思っている人ともいふが、できたらがまんしてほしい。出立にあたり、いくつかの事を言っておく。オレに、ひいき・差別は絶対にしない。許さない。俺はけんめいに努力するが、それでともあひいきしているように感じられる事があるかもしれない。その時は、えんりよく言ってもらいたい。

オレに、諸君の一人残らず、先生がかしこくしてやる、できるようにしてやる。でも、これは先生だけがやっても、君達が努力せねばできない。そのため二つのことを心してもらいたい。ひとつは<教室とは、まちがえる

場所だということだ。あらゆる学問は、まちがいのの中から発展させられてきた、＜自分はできる＞と思ったり、＜自分はできない＞とっているのは共に錯覚である。どちらにしても、諸君が思っているほどではない。

◇ 黒板に数字を書いて、「0(ゼロ)は何を意味するか」聞いてみた。芝原がさっと手を上げ、他に5、6名いた。芝原に指名すると「何もない事です」と答えた。それをほめ、手を上げた5、6名を立たせほめた。そして「何故、手を上げない。内心ではそんな事と思ってるんだろう。しかし手を上げた人と上げない人では天と地ほどの差がある。上げない人は、まちがえたら恥ずかしい、かっこ悪い等と、かっこつける事だけ考えていたからだ。天と地ほどの差があるんだ。」ときつく言った。

しかし「ゼロの意味はこれだけでない。思いついた事を何でもいいてから言ってみなさい」と言った。名取と伊藤の2名しか手が上がらなかった。名取は「出発点」と答え、伊藤は「0、1、2の0」と答えた。温度計の0度は温度が何もないことではなく、基準である事を話し、その二人をほめた。ゼロは他にも意味があるが、省いた。ついで漢字の「山川」を書き、「読みなさい」と言った所、芝原がさっと手を上げ、4、5名があがった。芝原を指名すると「やまかわ」と答えた。「他にもある」と聞いたが誰一人答えられなかった。「やまかわ やまかわ さんせん」のつがいを説明した。「このように、できるできないといっても差がない。一年生の宿題をすらいもないのだ」と話した。「うんとまちがえなさい。まちがいの山をつくりなさい」と言った。そして毎日二時間、机に向かうよう要求した。芝原をのぞいてみんな手を上げた。芝原は自信がないというのだ。その正直さをほめ、芝原は努力目標でいいことを話し、他の人からやるといったのだから、やらなかったらその人間はどうやってもしないと言いきり、40分を終えた。そのあと2時間、何も手がつかないほど、つかれていた。

子どもの可能性を開く教師の力。見えないものを見抜く教師の力

手塚 美和

1. どの子にも可能性があることを信じる

向山氏 28 歳時の『アンバランス』。

29 歳の時の『エトランゼ』。

31 歳『エトセトラ』

33 歳『スナイパー』。

すべてに、共通して書かれていること。

全ての人間には、一人一人限らない
可能性がある

それは、新しく子ども達と出会うと、向山氏が必ず話すことである。

全ての子に可能性がある。

それを具体的に証明する一つの手立てが、「跳び箱」だ。

1975 年 4 月 12 日。子ども達との約束通り、向山氏は跳び箱を全員跳ばせた。

先生のいった通りにやれば とべたんだ。まだ、できないものがあるけれど、先生のいうとおりにやれば、きっとできと思う。(エトセトラ No.7)

5 年生を担当した時も、同様のドラマが起きている。

松元がとんだとき、すかさずおきた全員の拍手。それは、とてもあたたかいひびきだった。「人間は、だれだってできる」(エトランゼ No.18)

私もそんな体験をクラスの子どもたちと分

かち合いたかった。向山氏の指導をした。私の拙い指導でも、やはり全ての子が跳び箱を跳べるようになった。

向山氏はいう。

誰だって、良い教師になれる。
誰だって、良い授業ができる。
但し、絶対の条件がある。
教師が謙虚に学ばねばならないということである。(教え方のプロ・向山洋一全集 4)

謙虚に学ばねばならない。

謙虚に学べば、私でも、良い教師になれる。私でも、良い授業ができるようになる。そう信じることでできる教育技術を TOSS で学び始めた時の喜びを忘れられない。

2. 一流の教師は何を見ているのか？

謙虚に学ぶとはどういうことだろうか。

谷氏は言う

超一流のプロは、私たちが想像できる次元を超えたレベルの技を持っている。そういった世界を知った上での修業が大切だ。
(教師のベーシックスキル 7+3 ①)

冒頭で書いた「跳び箱を跳ばせる」技術それは、とても簡単な技術だ。

しかし、跳び箱という技をつきつめれば、

次元を超えた世界がある。

たとえば「着地」。

どたどたと着地するときと、美しく着地するときでは、足の指が違う。(エトランゼ No.18)

「足」が違うのではない。

「足の指」が違うのである。

教師は、上靴の中の足の指まで見えるようにならなくてはならない。(エトランゼ No.18)

「上靴の中の足の指」が見えるとは、どういう意味なのか？

上靴の中の指が、実際に見えるはずがない。着地した足の指、そこにつながる下半身から上半身へのしなやかな動き。

向山氏には、そうした全体が見えているのであろう。

さらに、向山氏は言う。

四人一緒に飛ばせて、全て見えなくてはならない。(エトランゼ No.18)

一人でも異次元なのに、四人一緒に見取るのである。

向山氏の異次元の見取りは、まだある。例えば、子どもに名前を書かせる場面。

最初の授業は自分の名前を漢字で三回書かすことである。一人一人持つ

てこさせ、ダメなのはやり直しを命じる。(5年の学級経営)

これだけで、①その子の性格、②学習態度、③今までの積み重ね、④家庭の机の上の様子、そうしたことが向山氏には分かるのだ。その上で「ダメなのはやり直しを命じる」という。①～④を見取ったうえで、「やり直しを命じる」のである。

そうすることによって、その子の学習への向かい方に介入するのである。

新一年生の持ち物から見取る場面。

筆箱は表情を持っているのである。技量のある教師は、その表情をのがしはしない。(子どもを動かす法則)

医師であれ、農民であれ、技術者であれ、プロは素人に見えない世界を持っている。その見取りに応じて、最善の手立てを打つ。

うまい方法だけを追い求めている、こうした力は身につかない。向山氏や TOSS の先生方の世界を知った上で、学び続けることが、私には必要だった。

3. 教師の見る力を磨く

「跳び箱を全員跳ばせる」それは、子どもたちの未来を拓く第一歩である。その第一歩でとどまることなく、さらに教師の見る力を高めていきたい。これからも、謙虚に学び続けていく。



4 月特典

No.17 | 2025年4月

向山洋一 教育資料

1975 「出会いの序章」

手前、生まれも育ちも品川、旗の台です

発行日 2025年4月4日

発行所 向山洋一教育技術研究所

所在地 〒142-0064 東京都品川区旗の台2丁目4番12号



谷和樹の教育新宝島

<https://shintakarajima.jp>



向山洋一公式サイト

<https://mukoyamayoichi.com>

このPDFは、プリンタの「冊子印刷」を選択すると冊子になります。
他人への譲渡および個人研究以外の目的で使用するを禁じます。